様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月 ２９ 日現在

機関番号：２１６０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０５４８

研究課題名（和文）英語の関係詞節の接続形式と発話解釈に関する意味的・語用論的研究

研究課題名（英文）Semantic and Pragmatic Studies in the Relationship Between the English Relative Clause and Its Main Clause

研究代表者
中山　仁（NAKAYAMA, Hitoshi）

福島県立医科大学・看護学部・教授

研究者番号：７０２５９８１０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：主節と関係詞節の連結関係の特徴について、意味的・語用論的観点から考察した。特に、先行詞の内容を限定していないと思われる制限節や、前後がコンマ（comma）で区切られていない非制限節といった、ある意味例外的な関係詞節に注目し、一般的な制限節・非制限節との関連性を探った。その結果、主節と関係詞節には「必然性」「情報の重要度」「限定性の希薄化」という概念に基づく意味的・語用論的な連結関係があり、それを背景として節同士の連結の緊密度に段階性が生じることを説明した。そして、この段階性を反映した関係詞節の新たな分類を提案し、関係詞節全体の連結関係についての一般化を行った。

研究成果の概要（英文）：This series of studies is concerned with how English relative clauses can be analyzed and classified in terms of semantic and pragmatic properties of clausal connection between the main and relative clauses. A closer study of “exceptional” restrictive and nonrestrictive relative clauses suggests a possibility that there may be certain semantic and pragmatic factors that allow the speaker to use such exceptional forms of expression.
The research focuses on a set of general ideas of necessity, information value, and weakening of restrictiveness in order to give a better account of the closeness between the main and relative clauses. It proposes a new classification of relative clauses that reflects the gradient based on these general ideas and it concludes that the classification has an advantage over the traditional restrictive-nonrestrictive dichotomy.

研究分野：人文学

キーワード：関係詞　制限的　非制限的　段階性　必然性　限定性

１．研究開始当初の背景

概して、英語の関係詞節は、直接先行する名詞の内容を限定する従属節であると定義できる。しかし、個々の実例に目を向けると、関係詞節とはどのような形をしているのか、また、関係詞節の機能とはどのようなものなのかという問題に対して完全な解答を与えることは困難であり、それほどに関係詞節は多様な表現形態・伝達機能を持っていると言える。例えば、談話分析の観点から言えば、一般に制限的関係詞節の主節は断定され、関係詞節は前提とされるが、この原則から外れる例は多い。以下の (ai) の関係詞節の内容は原則どおり前提とみなされるが、(aii) の関係詞節は話し手によって断定される内容である。

(a) i. We only employ people *who clearly have computer skills*. (*Macmillan English Dictionary for Advanced Learners*[2])

ii. That waiter served me a steak *that honestly made me sick*. (Fairclough 1973)

また、非制限的関係詞節は常に断定的で、かつ、一般には (bi) のように主節の背景情報として機能していると見なされるが、中には (bii) のように、関係詞節の情報価値が主節と同等あるいは (関係詞節が文末位置であることから) 主節以上と見なされうる例もある。

(b) i. Rattlesnakes, *which are poisonous*, should be avoided. (Quirk *et al*. 1985)

ii. A skilled workforce is essential, *which is why our training programme is so important*. (*MED*[2])

本研究では、まさにこのような機能面での関係詞節の性質について、制限節・非制限節の区別なく包括的に説明することができないか、そのための説明概念は何かを明らかにすることを目標の中心に据えた。

本研究の着想の原点は、これまで本研究代表者 (中山) が研究を継続してきた、非制限的関係詞節の独立に関する考察にある。そこでは、通常の非制限的関係詞節が独立文になる意味的・語用論的要因を、文連結の一般原理に基づいて説明した。この場合は、文連結 (節連結) の緊密度が、話し手の意図の関与の度合いに応じて低くなる点が注目された。その後、さらに観察の幅を拡大してゆくと、特に小説などにおいて、主節に直接後続する (commaなどの区切りの介在しない) 非制限的関係詞節が確認された。これは、独立文となった非制限的関係詞節とは対照的に、主節との緊密度が高い事例であると言える。中山は、従来の分析を批判検討した上で、この事例の生起要因を語用論的観点から説明した。独立文となる非制限的関係詞節と、主節に直接後続する非制限的関係詞節の検討から言えることは、非制限的関係詞節が、語用論的要因に基づいて、主節との連結形式に影響を受け、その要因に応じて主節との連結の程度に段階性が生じるということである。

以上は、非制限的関係詞節の表現形式 (連結形式) と語用論的意味の関係に関する考察であった。一方、従来の指摘にもあるように、制限的関係詞節と非制限的関係詞節との間にも、ある種の連続性 (段階性) が存在することが指摘されている。そこで、(aii) のような断定的な制限的関係詞節や、節連結の緊密度の高い非制限的関係詞節などを、共通の概念に基づいて段階的に位置づけることができれば、制限・非制限という二分法からは見出せなかった、関係詞節全体の形式と機能についての一般的傾向を提示することが可能となる。

２．研究の目的

本研究は、関係詞節を含む英語表現に関する広範な事例観察を通して、主節と関係詞節の連結関係についての特徴を、意味的・語用論的観点から明らかにしようとするものである。具体的な検討内容は、第１に、主節と関係詞節の緊密度の関係と、それに基づく関係詞節構文の解釈プロセス、第２に、先行詞と関係詞節との意味上・談話機能上の関係、第３に、第１・第２の検討結果に基づく関係詞節のタイプ間の連続性である。

分析にあたっては、情報構造、話し手の意識・意図、聞き手の解釈プロセスなどを考慮に入れ、文連結の一般原理とも整合性を保ちながら、主節と関係詞節との意味的・語用論的関係の一般化を図る。これにより、いまだに多くの疑問が残る関係詞節の問題のうち、その機能と伝達上の効果について新たな視点を与えることが期待できる。

３．研究の方法

「研究の目的」で挙げた３つの検討内容に沿って研究を進める。

(1) 主節と関係詞節の緊密度の関係と、それに基づく関係詞節構文の解釈プロセスについての検討：

関連する現象として含まれる文のタイプは、(c) のような、主節から完全に分離した (すなわち独立文となった) 非制限的関係詞節と、(d) のような、主節と密接な連結関係を持った (すなわち comma などの区切りの介在しない) 非制限的関係詞節である。

(c) We can take one or two clouds on our Christmas cheer … *Speaking of which*, where's Bill? I want to wish him season's greetings.' (BNC Online)

(d) He took it [a report] straight in to Radl *who opened it and examined the contents*. (J. Higgins, *The Eagle Has Landed*)

中山のこれまでの研究から、(c) については、話し手の意図（特に「結論・疑問の発生」などに関わる推論の導出）の関与が高い場合に、(d) については、「非制限的関係詞節が、文脈あるいは主節の情報に基づいて必然的

帰結である」、または、「聞き手にとって予測可能な情報である」と話し手が意図している場合に生じる傾向があるとの結論に至った。(d) は小説などでしばしば見られる表現であるため、現在までにいくつかの小説における事例を検討してきたが、資料を他の種類の書き言葉、あるいは、話し言葉に拡大することによって、さらに興味深い一般化が可能と思われる。したがって、上記の結論を支持する資料の充実を図り、語用論的要因を中心に、非制限的関係詞節の緊密度の関係について整理する。

次に、主節と関係詞節の節連結の緊密度の関係と、それに基づく関係詞節構文の解釈について検討する。最終的には、文連結（節連結）の一般原理、節連結の類型論を根拠に、関係詞節の連結関係における連続性が妥当であることを示す。さらに、先行詞と関係詞節との機能上の関係についての検討を行う。最後に、以上の検討から得られた結果に基づく新たな関係詞節の分類を試みる。

(2) 先行詞と関係詞節との意味上・談話機能上の関係についての検討：

まず、制限的関係詞節とその主節との連結関係について検討を行う。問題の中心となるのは「制限的関係詞節と非制限的関係詞節との間であいまいな位置づけがなされている関係詞節」である。具体的には、先行詞と関係詞節との修飾関係において、関係詞節が限定的に機能する場合と記述的に機能する場合を個々の用例について吟味し、それらが必ずしも制限的関係詞節と非制限的関係詞節という二分法を使って説明できるとは限らないことを示す。また、発話意図によって制限的関係詞節と非制限的関係詞節の両方の解釈の可能性が生じる表現についても扱う。

次に、上記の研究を補完するため、制限的関係詞節とその先行詞との機能上の検討を行う。もちろん、先行詞が定名詞句か不定名詞句かによって関係詞節との機能上の関係が異なることについては、既に文法書等で言及されている。例えば、不定名詞句が先行詞の場合、制限的関係詞節は断定を表すという指摘である。しかしながら、この特徴は一様ではない。例えば以下のように、先行詞が定名詞句であっても関係詞節は断定を表すと見なされる場合もあるからである。

(e) The father *who had planned my life to the point of my unsought arrival in Brighton* took it for granted that in the last three weeks of his legal guardianship I would still act as he directed. (Huddleston and Pullum 2002)

そこで、この問題については、情報構造、および、文脈情報と話し手の伝達意図を考慮に入れることによって、より妥当性の高い説明を目指す。

(3) 関係詞節のタイプ間の連続性についての検討：

関係詞節の連続性や先行詞の指示機能と連動して、談話・語用論上の観点も考慮に入れた、関係詞節の新たな分類について検討する。これについては、既に中山の先行研究において暫定的に４つの範疇を提案している。すなわち、(より狭義の) 制限的関係詞節、記述的・中心的関係詞節、記述的・周辺的関係詞節、および、継続的（連続的）関係詞節である。意味的には制限性・記述性の概念を、機能的には情報伝達の相対的な重要度を考慮に入れる必要があると考えられる。また、話し手の発話意図とも関連づけて範疇間の段階的な関係を示す。

この分類（のための検討）は英語教育上の問題提起にもなる。すなわち、英語学習者が関係詞節を解釈する際、先行詞の機能上の特徴や発話意図などを考慮に入れることによって、制限・非制限の二分法に支配された従来の思考・解釈方法に左右されることなく、より現実に即した発話解釈に辿り着くためのヒントを与えることになると思われる。

４．研究成果

(1) 主節と関係詞節の緊密度の関係と、それに基づく関係詞節構文の解釈プロセスについて：

中山のこれまでの研究によれば、(f) (=(d)) のような、主節と密接な連結関係にある関係詞節構文は、「非制限的関係詞節が、文脈あるいは主節の情報に基づき、必然的帰結である」、または、「聞き手にとって予測可能な情報である」と話し手が意図している場合に生じる傾向があると考えられていたが、検討を進めた結果、連結の緊密度の関係を説明するには、「必然性」や「予測可能性」という概念では不十分であり、伝達内容全体において、関係詞節で示された情報の重要度を考慮に入れる必要があることが分かった。

(f) He took it [a report] straight in to Radl *who opened it and examined the contents*. (J. Higgins, *The Eagle Has Landed*)

例えば、(e) の who 節は文脈上情報の重要度の高い（これを除くと情報伝達上の意義が失われる）関係詞節であるために、主節との緊密度が高まったものと捉えることができる。

(2) 関係節のタイプ間の連続性について：

関係詞節に見られる、ある種の例外的用法、すなわち、先行詞の内容を限定していないと思われる制限節や、前後がコンマで区切られていない非制限節といった、いわば例外的な関係詞節についての意味的・語用論的考察を行った結果、主節と関係詞節は「必然性」という概念に基づく段階的な連結関係を持ち、それを背景に例外的表現形式が実現されることを確認した。その上で、このような段階性を反映した関係詞節の新たな分類を提案

し、関係詞節全体の連結関係についての一般化を行った。関係詞節の分類としては、本研究に先行して提示した中山の仮説があるが、今回は関連する資料の追加を行なった上で、「必然性」の概念についてより厳密な定義を行い、分類方法に修正を加えることができた。

(3) 主節と関係詞節との意味関係について:

節同士の緊密度の関係とは別に、(g)、(h)のような、制限的関係詞節と非制限的関係詞節との間であいまいな位置づけがなされている関係詞節を中心に、主節と関係詞節との意味的・語用論的関係についての研究を行った。

(g) i. He's got *a new car* *that goes like a bomb*.
(OR He's got *a new car*, *which goes like a bomb*.)
ii. We became friendly with *some nurses* *that John had met in Paris*.
(OR We became friendly with *some nurses*, *whom John had met in Paris*.) (Swan 2005)

(h) All this I gave up for *the mother* *who needed me*. (Quirk *et al.* 1985)

具体的には、先行詞と関係詞節との修飾関係において、関係詞節が限定的に機能する場合と記述的に機能する場合を個々の事例について吟味し、両者が意味と情報構造に基づいた相対的な関係にあるという結論に達した。特に、この場合に関わるのは「限定性の希薄化」、「必然性（予測可能性）」、「情報の重要度」という概念である。これらは、制限的関係詞節が単に制限性という概念によって説明することのできない関係詞節に対して、段階性を導入するための基本的な要素と考えられる。関係詞節の段階性については、既に Quirk *et al.* (1985) などの指摘があるが、今回の考察によって、「関係詞節を制限的関係詞節と非制限的関係詞節で単純に二分する」という従来の考え方では説明が困難であった事例について、より妥当な説明を与えることが可能となった。

とりわけ、本研究では関係詞節が名詞句の後置修飾の一形態である点に注目し、より一般的な見地から関係詞節の限定の意味について考察した。具体的には、of 句および関係詞節による名詞句の限定に関して、両者に平行して見られる含意の関係の観察に基づいて、集合からの限定にも段階性があると捉え、それを糸口に、制限的関係詞節における「限定性の希薄化」の概念を仮定した。この概念を通して、研究前半まで問題となっていた「制限的」と「記述的」という２つの概念の関係を明確化することができた。

(4) コンマ（comma）を伴う that 節について：

この事例については、従来、文学作品は別として非制限的用法には用いられないという（特に規範的な立場からの）指摘がなされてきた。確かに、実際の使用頻度は高くないが、辞書の定義などでも使用されるなど、使用範囲は想定される以上に広いことが分かった。この現象にはスタイル上の要因も含めていくつかの要因が別個に関係しているが、本研究では「限定性の希薄化」と「情報の重要度」を新たな要因に含めことによって、that 節とコンマの有無の関係を、主節と関係詞節の連結関係全体の中に位置づけて説明することが可能となった。

＜引用文献＞

①Fairclough, Norman. 1973. “Relative Clauses and Performative Verbs,” *Linguistic Inquiry 4. 4*, 526-531.
②Huddleston, Rodney D. and Geoffrey K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge University Press.
③Quirk, R, S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
④Swan, M. 2005. *Practical English Usage*, 3rd ed., Oxford University Press.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１件）

①中山　仁、英語の関係詞節の段階性に関する機能的・語用論的考察、福島県立医科大学看護学部紀要、査読有、16 号、2014、17－26

〔学会発表〕（計１件）

①中山　仁、例外から考える英文法―関係詞節の談話上の特徴について―、第 8 回英語語法文法セミナー、2012、大阪

〔図書〕（計２件）

①中山　仁、ウィズダム英和辞典（第 3 版）、井上永幸・赤野一郎（編）、三省堂、2013
②中山　仁、ことばの基礎（１）―名詞と代名詞（シリーズ「英文法を解き明かす―現代英語の文法と語法」内田聖二、八木克正、安井泉（編））、研究社、2016（予定）

６．研究組織

(1)研究代表者

中山　仁（NAKAYAMA, Hitoshi）
福島県立医科大学・看護学部・教授
研究者番号：７０２５９８１０

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし